冬に咲く花

市川弥佳

その日は朝から雨が降っていて、僕はビニル傘を持って家を出た。冬の寒さに思わず身震いする。息を吐くと白く濁ってとけた。

「乃木くん、おはよう」

バイト先の花屋の店長に挨拶され、僕もそっけなく返す。

「おはようございます、店長」

「寒いわねえ」

「冬ですからね」

答えて、白色のマフラーを外す。僕はそれをじっ、と見つめた。

「雪になりますかね、今日」

「天気予報では言ってなかったけど……寒いものね。なるかも」

緑色の店のエプロンを身に着けて、伸びてきた髪を結わく。うなじが隠れるか隠れないかくらいの長さなので、結ぶほどのものでもないのだけれど。

「首、あったかそうね」

店長が花を運びながら微笑む。

「ええ、まあ」

僕は苦笑いで答えた。

雨のせいか、客足はあまり無かった。せわしなく歩く人々の眼に、花なんてものは映らない。段々と雨が姿を変え始めたのは、時計が真上を指したころだった。

「あら、霙(みぞれ)？」

店長がおかっぱの髪を揺らして店の外をひょいと覗く。僕もその後ろから空を覗き込むがよく分からない。しかし、地面を見てみると、黒く重々しいアスファルトが空から落ちてくる雨だったものを弾いていた。

「そうみたいですね」
しゃこん、しゃこん、とその音は耳の奥まで届いた。
「んー……このまま雪になると困るし、今日はもうお店閉めちゃいましょっか」
店長は大きな百合の花を運びながら言った。趣味でやっているような店だ、と前に言っていたっけ。この人は自由に生きている。

店を閉める支度をしていると、
「すみません」

店先から上品な声がした。そこには白色の暖かそうなニットワンピースの女性がいた。白色の傘を差して、店内を覗き込んでいる。
「なにかお探しですか？」
営業スマイルを意識しながら声をかけると、その女性は傘を閉じて店内に入ってきた。
「冬に咲く花を探してるんです」
「冬に咲く花……ですか？」
「はい」
あまりに嬉しそうに言うので僕は困ってしまった。冬に咲く花、と言われても、少ないことは少ないのだけれど、何の特徴もなしにそれだけ言われたって仕方がない。どうにかして手がかりを得ようと僕は質問をした。
「何色のお花ですか？」
「白色の、いい香りのするお花」
冬に咲く、白くて香りのある花、と聞いて僕はある花に思い当たった。僕は「少々お待ちください」と言って奥へ向かった。
「店長、あの」

僕が店の奥に行くと、店長はおかっぱ髪に似合わず紅茶を飲んでいた。優雅なものだ。店長はにこにこしながら、

「あ、閉店の支度できた？」

なんて言っている。

「それはもう少しなんですが、お客さんがいらしてて。枇杷（びわ）の花……って、ありますかね」

「あら、偶然。この間見つけて、いただいたのがそこに。枝だけど……いいかしら」

「多分」

「じゃあ、そこの箱の中ね。もらい物だから代金は大丈夫。そのお客さん終ったら、シャッター閉めにいくから呼んでください」

「はい」

僕は返事をして、枇杷の花をあの女性に渡しにいった。

「お客様、こちらですか」

女性は嬉しそうにこちらを向いて、その花の香りをすん、と嗅いだ。

「――あ、この香り。これ、なんてお花なんですか」

「枇杷です」

「びわ？」

「実（み）はよく見かけますよね。花のほうは中々珍しいですが。代金は結構だそうなのでお持ち帰りください。では、今日はこれで」

女性はほくほく顔でそれを抱えて帰っていく。珍しいお客さんもいるものだな、と思いながら店長を呼び店を閉めた。あの枇杷の花の香りが、まだどこかに残っていた。

*

駅前は閑散としていた。傘を霙が叩く。僕はマフラーをぐっと口元まで引き上げて、寒さに負けじと歩く。駅に着いて傘を閉じ、改札を通り過ぎる電子音ですら、しんとした駅にひどくこだました。

ホームに出ると、お向かいにもどこにも人の姿はない。霙が線路に弾かれる音、プレハブの屋根に弾かれる音、そして遠くから聞こえる踏切の音だけがその場所を構築していた。

「あー……」

空に呟く。大学とバイトを両立して生きている自分がなんとなく滑稽に思えてきて、でもこれが当然なんだと思う度、自分には他にできることがあるんじゃないかと錯覚する。そんな繰り返しがあと二年も続いていくのだ。自分はどこへ行くのだろう。どこへ行きたいのだろう。いやーどこかに行くことなんて自分に出来るのだろうか。行き先の分からない電車に人生を例える人がいた気がするけれど、もしかしたら自分は、その電車にすら乗れていないのかもしれない。

電車がホームを通過する。霙の音がかき消された。

「あれ、店員さん?」

上品な声がした。振り返ると、さっき枇杷の花を買っていった女性が、大事そうにそれを抱えて立っていた。

「あ、……はい、こんばんは」

僕は思わずそう答えた。その受け答えにくすくす笑う彼女から、ふわりと枇杷の香りが漂う。

「さっきはありがとう、店員さん。素敵な香り」

「いえ……仕事なので」

女性は微笑みを絶やさない人だった。僕がなにを

言っても彼女は優しく笑った。ベンチに座ろうと促され、僕とその人は並んで座った。
「誰もいないね」
「そうですね」
霙の音。また遠くで踏み切りの音。
「あ、電車来る」
「乗るんですか？」
「うん。店員さんは、次の電車なのね」
女性がベンチから立ち上がる。僕も思わず立った。そうしたらまた彼女が笑うので、僕もなぜか笑ってしまった。
電車が止まる。扉が開いて、彼女はその中へと吸い込まれるように乗り込む。一瞬の呼び止めたい衝動にかられ、僕は気がついたら声を出していた。
「あの、お名前は！」
女性は驚いたようだったけれど、また微笑んで、少し考えるようにしてから
「ミゾレ」
と答えた。扉は閉まった。
それは明らかに偽名だったけれど、それでも、僕は彼女がそう名乗るならそう呼ぼうと思った。ミゾレ。中々いい名前だ。

*

ミゾレさんは、それから時折花屋に顔を出すようになった。店長とは気があうようで、先日は新しい紅茶がどうしたこうしたで、二人で店の奥で紅茶を飲んでいた。雰囲気も似ているし、おかっぱ髪な店長と比べてロングヘアーのミゾレさんは大人っぽく見えるけれ

ど、どうやら同い年らしい。
「店員さん」
ミゾレさんはいつも僕をそう呼んだ。それは普通なら距離を感じる呼び方なのだろうけれど、彼女が呼ぶと、不思議と親しみを感じた。ミゾレさんはどうやら、誰とでも馴染める人らしい。
そういえば、ミゾレさんにはひとつ不思議なことがあった。
店に来るたび、来るたび、少しずつだけれど、髪が短くなっていることだ。初めて会ったときは腰までのロングだったはずなのに、今は肩甲骨下くらいまで短くなっている。店長にそれを言ったところでどうにかなるわけでもないので言わないし、何か聞いてはいけない気がしてミゾレさんにも聞きかねていた。

「こんにちは」
いつもと同じ上品な声で、ミゾレさんは店へやってきた。
「あっ、ミゾレちゃん。いらっしゃい～。あのね、新しい紅茶がね……」

まるで女子学生のようにはしゃぐ店長を横目に苦笑いしていると、ミゾレさんは僕に目配せして微笑んだ。どうやら、仕事の邪魔をして申し訳ないと思っているみたいだ。僕はそんなことない、という気持ちをこめて微笑み返したけれど、伝わっているだろうか。
「よかったら飲まない、ミゾレちゃん」
「本当？　じゃあ、一杯だけ」
嬉しそうに店の奥へ入っていく二人を見送って、僕は店長が放棄した床の掃き掃除を再開した。楽しそうな二人の声を聞きながら、床を掃いたり机を拭いたり

まるで女子学生のようにはしゃぐ店長を横目に苦笑いしていると、ミゾレさんは僕に目配せして微笑んだ。どうやら、仕事の邪魔をして申し訳ないと思っているみたいだ。僕はそんなことない、という気持ちをこめて微笑み返したけれど、伝わっているだろうか。

「よかったら飲まない、ミゾレちゃん」

「本当？　じゃあ、一杯だけ」

嬉しそうに店の奥へ入っていく二人を見送って、僕は店長が放棄した床の掃き掃除を再開した。楽しそうな二人の声を聞きながら、床を掃いたり机を拭いたりしているうちに、その日の開店時間は終わった。

「また来てね、ミゾレちゃん」

「うん、また来ます。店員さんも。また」

ミゾレさんは相変わらず微笑んで、店を後にした。

――あ……。

その背中を見て気がつく。今日もまた彼女の黒い髪が短くなっていることに。

「雨、降りそうね……」

店長が心配そうに見つめる向こうの空は、どんよりとした黒い色をしていた。

＊

帰宅中に雨に降られ、急いで駅へ駆け込んだ。すると、いつだかのように駅には人の気配が無い。僕は電子音と共に改札を抜け、あのホームへ向かった。

電車は十分ほど遅れて運行していた。人身事故らしかった。ベンチに座ってマフラーで暖を取っていると、誰かがホームへとやってきた。

ミゾレさんだ。僕は、何故かそう確信していた。

電車がホームに着く。それは僕の家の最寄り駅を通る電車ではなかったけれど、ミゾレさんが先日乗っていった電車だ。けれど彼女は動かなかった。人違いか、と思ったとき、電灯が彼女の顔を照らした。それは確かにミゾレさんだったけれど、いつも店で見る、あの明るくて上品な微笑みはなく、人形のように冷たいほど無機質な表情で、電車を見送っていた。

僕は動けなかった。声をかけようと思っていたけれど、その考えもどこかへいった。怖かったのか、驚いらなかった。ミゾレさんは、ふらふらとホームの端へと向かった。そこから線路をじっと見つめた後、覚束ない足取りでホームを後にする。僕は思わず彼女の後を追った。今にもいなくなってしまいそうな、そんな雰囲気だったから。

彼女は改札を出て行った。僕もそれを追う。ふらふらと歩いていくミゾレさんにどう声をかけていいのか分からなかった。自分の進む道すら分からない僕が、誰かの進む道に口出しなんて出来るはずもないんだ。

ミゾレさんがようやく止まったのは、駅のすぐそばの公園だった。そこからはあの線路が見える。僕はふと、彼女が死ぬ気なのではないか、と思った。だからもう戸惑ってなんていられないんだと頭で理解する一方、身体は動かなかった。息を殺して彼女を見ていた。死ぬかもしれない人を。僕は、見ることしか出来ない。

電車の音が遠くから聞こえる。カンカンカンカンと踏み切りの音も聞こえる。自分の目の前で今なにが起ころうとしているのか、必死に把握しようとしても出来なかった。なにも追いつかず、手遅れになるかもしれないのに僕はなにも出来ず。ただ立っていた。情けないほどに無力だった。自分の鼓動が厭に響く。

ミゾレさんの手元で何かが光った。それが鋏だ、とやっと理解したとき、彼女はその鋏で、自らの髪の毛をしゃきん、と切り落とした。

*

「――ごめんなさい、驚かせて」
ミゾレさんは公園のベンチでそう笑った。僕は自動販売機で買ったホットコーヒーを一つ彼女に手渡す。ありがとう、と小さな声がした。
「いえ……」
内心は、鼓動は収まらないし見つかって動揺しているし大変だった。震える手でマフラーを外す。どうにも暑かった。
「なんで……髪を……」
「――ユータ」
ミゾレさんは質問を遮って、その名前を呼んだ。
「え……」
「店長さんに聞いたんです」
おかっぱの店長の顔が浮かぶ。同い年とは思えない二人の姿も。
「店員さんの名前、ユータっていうんですね」
「そ、そう……ですけど」
話が飛びすぎてついていけない。返事をするので精一杯だった。
「私の夫もね、ユータって名前だったんです」
「『だった』……？」
ミゾレさんは、悲しそうに線路を見た。

「一年前、この駅で、線路に落ちて死んだんです」
「……」
「人混みの中で足を踏み外したらしくて、事故だったんですけれど。いろいろあって、やっと落ち着いた頃、彼がよく話してた花のことを思い出したんです。家の庭に昔あって、冬になると白い花が咲いて、いい香りがしたんだって。よく言ってた。だからそれが気になって、あの頃は毎日その花を探していたんです。どこに行ってもなくて、今日はここで最後にしようって思って入ったのが、あの店。まさか本当にあるとは思って

ませんでした」
　あの霙の日、嬉しそうに冬に咲く花をと言った彼女を思い出す。白い傘に、白いニットワンピースのミゾレさん。枇杷の花の香り。
「本当にありがとう、店員さん」
　その微笑みは、今までと同じ明るく上品なものではなくて、必死に泣く事を我慢しているような、自分に何かを言い聞かせているような、そんな微笑みだった。
　遠くから電車の警笛の音がする。それから少しして電車が駅を通過していく。遅れて風が立つ。彼女の、更に短くなった髪が風に揺れた。
「……髪を切ったのは、どうしてなんですか。それも、少しずつ」
　ミゾレさんは、自分の髪を触って、少し俯いた。
「昔から、髪を切るとなんだかすっきり出来て。ストレス解消っていうのかもしれません。でも、彼は……ユータは、私のあの長い黒髪が大好きだったんです。だから、ユータの香りが残っているあの家じゃ切ることができなくて。でも――駄目ですね。何度ショートにしようとしても、やっぱりユータの事を思い出すと……出来ませんでした」
　僕は、彼女の目に、光るものを少し見た。震える声で必死に喋りながら、段々と俯くミゾレさんを見ているのは辛かった。そんな彼女に何も言えない自分も、辛くてたまらなかった。
「鋏」
「え？」
「貸して下さい」
　ミゾレさんは恐る恐るあの銀の鋏を取り出して、僕に手渡した。僕はそれを少し見つめて、それから勢い

よく、自分の結わいていた髪をしゃきんと切り落とした。
「てー、店員さ……」
「――柚太です。乃木、柚太です」
いつもミゾレさんがしていたみたいに、明るく上品に微笑んだつもりだったけれど、上手くいっただろうか。ミゾレさんは泣いているんだか笑っているんだか分からない顔をして、「はい」と消え入りそうな声で答えた。
「ミゾレさんの言うとおりだ。なんだか、すっきりしますね」
なんだか少し物足りない首筋をくすぐったく思う。電車は通り過ぎていった。

*

その日は朝から雨が降っていて、僕はビニル傘を持って家を出た。冬の寒さに思わず身震いする。息を吐くと白く濁ってとけた。
「乃木くん、おはよう」
バイト先の花屋の店長に挨拶され、僕は笑って返す。
「おはようございます、店長」
「寒いわねえ」
「冬ですからね。今日は花、あまり外に出さないようにしましょうか」
答えて、白色のマフラーを外す。それから、カウンターに置かれた枇杷の花の水を取り替えようとして、僕はその花びらをじっと見つめた。
「雪になりますかね、今日も」
「天気予報では言ってなかったけど……寒いものね。

なるかも」
緑色の店のエプロンを身に着けて、伸びてきた髪を結わこうとして、首筋で右手が空振りした。またやってしまった、と右手のやり場に困る。少し恥ずかしい。
「首、寒そうね」
店長が花を運びながら微笑む。
「ええ、まあ」
僕は微笑んで答えた。